

個と公——個人レベルの情動が集団レベルでの情動に集約される瞬間

Smith, E. R., Seger, C. R., & Mackie, D. M. (2007). Can emotions be truly group level? Evidence regarding four conceptual criteria. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 431-446.

内閣府日本学術会議 上席学術調査員 **中島 由佳**

女子高時代、学年ぐるみでやんちゃをした私たちに、校長がこう嘆いたのを覚えている。「君たち一人ひとり花のように美しい。しかし、花は集めて花束にしても美しいのに、どうして君たちは集団になると悪さをするのだ？君たちも花のように、大勢でも美しくあれ」。

無理である。いかに花に例えられようと、ひとは花とは異なり、社会性を持つ。ひとは集団を形成すると、個人レベルとは異なる情動、行動を示すのである。

たとえば、同じ会社に勤めるAさん、Bさんは、年齢、趣味、働く部署など特に共通するものはなく、単なる顔見知り程度の面識である。しかし、互いに俳優Cの熱烈なファンだと判明したとたん、強い連帯感を持ち、一緒に追っかけを展開し、Cとの婚約が発表された女優Dに対しては強い敵対心を共有する。ロミオとジュリエットは恋人同士であったが、個人同士の愛よりもモンタギュー家、キャピュレット家の一員としての振る舞いを求められ、苦しんだ。忠臣蔵で有名な浅野家の家臣は、そば屋で隣り合わせた男に特別な感情を抱かないであろうが、吉良の家臣と知ったとたん、心の中は憎しみに満ちるに違いない。

このように、ある集団に帰属することで、自分の帰属する内的集団、外部の集団に対する信念が生まれ、集団レベルでの情動が生起することは往々にしてみられる。情動は最も古くから人間に備わる精神機能のひとつであるにもかかわらず、情動がなぜ生じるのかについての研究は比較的新しい。特に上記のような、集団レベルでの情動についての研究、集団間情動理論 (intergroup emotions theory) は、1990年代になってから緒に就いた研究である。しかしこれまでの集団間情動の研究では、外敵集団への敵対心や内的集団への凝集性など、集団レベルで生起する情動のみに焦点を当てたものが多かった。その中で本論文は、自分がある集団の成員であると意識することにより、個人が日常で感じる様々な情動はどのように変化するのか、

集団への帰属意識により個人の情動が集団的情動へと変わるメカニズムについて、検証を行っている。

Smith *et al.* は、インディアナ大学の心理学を専攻する学生に対し、まず、個人として感じている情動を測定した。その上で、1)アメリカ人としての、および民主党/共和党への帰属意識の強さ、2)アメリカ人として、民主党/共和党支持者として感じる情動をそれぞれ測定した。測定された情動は、個人的情動、集団的情動ともに、満足感、希望感、誇り、幸福感、感謝、尊敬の6種類の正の情動と、恐怖、自己嫌悪、不安、罪悪感、苛立ち、自分が帰属する集団への怒り、外的集団への怒りの7種類の負の情動であった。また、内的・外的集団に対して自分が取るであろう行動として、外的集団への攻撃および回避的態度、自分の帰属する内的集団への支持的な態度の3種類が測定された。

その結果、個人的情動と集団的情動との興味深い関係がいくつか示された。

ひとつは、個人としてのほうが、集団の成員としてよりも生き生きと情動を感じているということである。本論文では、個人として感じている情動のほうが、「アメリカ人として」「政党支持者として」など、集団に自分を帰属させた場合に感じる情動よりも全般的に強かった。そして、「〇〇集団の成員として」と意識した場合に、個人として感じる情動より強く感じられたのは、アメリカ人として帰属した場合は誇りと罪悪感、民主党/共和党支持者として帰属した場合は相手政党への怒りであった。つまり、ある集団への帰属が強まると、個人として今まで感じていた情動は意識されなくなってしまう。帰属する集団の成員としての誇りと相手集団への怒りのみが、際立って感じられるようなのである。

このことは、個人としてよりも、アメリカ人として、また民主党支持者/共和党支持者としての帰属意識のほうが、誇りや満足感などの正の情動、外的集団への怒りと相関が高かったことから裏付けられる。個人

それぞれはニュートラルな意識を持っているにも関わらず、ある集団に自分を帰属させたとたんにステレオタイプ的な思考、情動に偏りがちであることが知見からは示唆される。また、このような自分の集団に対する肯定的な情動、外的集団に対する怒り、集団成員内での共有が高いことも、本論文では明らかにされている。

さらに本論文は、集団としての情動が行動レベルに及ぼす影響を報告している。集団成員として感じる外的集団への怒り、内的集団への肯定的な感情は、個人として感じたときに比べて、外的集団への攻撃的態度と回避的態度、内的集団への支持的態度を強めていた。その一方で、個人として日常に感じている罪悪感、自分の政党を支持する態度に、個人として日常に感じている不安は、アメリカを支持する態度に向かわせるという結果が示された。つまり、個人としての情緒が不安定であるときには、「寄らば大樹の陰」とでも言わなければ自分を集団に依拠させることにより、自分への罪悪感や不安感を解消しようとする志向を見取ることができる。さらには、内的集団への罪悪感、内的集団への支持的態度を弱める結果も見られた。個人的な罪悪感が集団への帰属に向かう方向性と併せて考えると、このような内的集団への罪悪感、別の、あるいはより大きな内的集団への帰属へと向かわせる可能性が考えられる。

本論文において興味深いのは、集団の成員としての内的・外的集団への情動や態度に注目しただけではなく、集団レベルでの情動は個人レベルでの情動・態度と相容れないことを明確化したところにある。本論文の知見からは、個人としての情動と集団成員としての情動は共存できず、自分がある集団の成員として意識した瞬間から、個人が持つ生き生きとした情動は消え、

集団が共有する情動パターンへと個人の情動パターンが変化するダイナミズムが浮き彫りにされる。そして、個人の情緒的不安定が集団への帰属を促し、個人の不安や罪悪感が内的集団への肯定感、外的集団への敵対心にすり替わるメカニズムも本論文からはうかがえる。この二者択一性こそが、集団的情緒、行動の本質であろう。

本論文の知見に沿えば、きのうまでの友達に対して今日からいじめる側となれるのは、いじめる集団に帰属することにより、その友達に対する個人的な情緒が感じられなくなるからであろう。ならば逆に、「いじめの傍観者・観衆はいじめの被害者への、加害者は傍観者・観衆への、個人レベルでの情緒を意識することが、いじめの解決の糸口となる」という逆方向の流れも、本論文の知見からは考える。争いにおいても然りである。敵対する民族の成員同士が直接的に問題について対話することにより、個人としての相互作用が敵対集団の成員に対する情動とは異なる、個人的な情動を生みうるのではないか。現に、アラブ系住民とイスラエル系住民が混住するアッカなどの地中海沿岸の都市では、市場などでやりとりを交わす中で、民族的帰属意識よりも隣人としての個人的情緒を優先させる人々の様子が報告されている。

私たちは花ではない。花ではないからこそ、外的集団に帰属する人たち一人ひとりを個人として認識し、肯定的な情緒を築くことができるとできるはずである。

なかじま・ゆか 内閣府日本学術会議 上席学術調査員。
最近の主な論文として「大学受験および就職活動におけるコントロール方略の働き——目標遂行に向けてのストレスへの対処として」（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文）。発達心理学専攻。